マレーシアの大学における外国語としてのマレー語教育の現状

ウン・シンティ、野元裕樹

1. はじめに
2. 現地調査
   2.1 マレーシア理科大学（**U**niversiti **S**ains **M**alaysia）
   2.2 マラヤ大学（**U**niversiti **M**alaya）
   2.3 マレーシア国民大学（**U**niversiti **K**ebangsaan **M**alaysia）
3. まとめと考察
   3.1 まとめ
   3.2 考察

1. はじめに

本研究はマレーシアの大学 3 校を取り上げ、マレーシアの大学における外国語としてのマレー語教育の現状を把握することを目的とし、インターネット上で公開されている情報および 2013 年 9 月に行った現地調査により得られた情報を報告する。

マレーシアでは、マレー語は「国語」として、そして「外国語」としての 2 通りの教育がなされている。まず、「国語」としてのマレー語教育はマレーシア国民を対象とする。マレー語母語話者（主にマレー系、その他ブミプトラ）にとっては、第一言語のリテラシー教育であり、非マレー語母語話者（華人系、インド系など）にとっては、第二言語教育である。本研究では「外国語」としてのマレー語教育について述べる。

2. 現地調査

2013 年 9 月 18-28 日の 10 日間で現地調査を行った。今回の現地調査では、マレーシア理科大学（**U**niversiti **S**ains **M**alaysia）、マラヤ大学（**U**niversiti **M**alaya）、マレーシア国民大学（**U**niversiti **K**ebangsaan **M**alaysia）の 3 大学を訪れた。各大学の位置は図 1 に示してある。

図 1　現地調査で訪れた三大学：①マレーシア理科大学（Universiti Sains Malaysia）、②マラヤ大学（Universiti Malaya）、③マレーシア国民大学（Universiti Kebangsaan Malaysia）

各大学における質問項目は以下の通りである。

- 学生数とその構成
- 授業の構成（レベル、時間数）
- 教材
- 達成度評価基準
  - ヨーロッパ言語共通参照枠組み（Common European Framework of Reference for Languages；以下 CEFR）またはその類を知っているか？
  - CEFR を実施しているか？
  - CEFR の必要性を感じるか？

以下では、これらの項目に関して、大学ごとに詳細を報告する。

2.1　マレーシア理科大学（Universiti Sains Malaysia）

はじめにマレーシア理科大学の概要を紹介する。マレーシア理科大学は、ペナン島州ジョージタウン（図 1 の①）に位置する。1969 年の設立で、マレーシア第二の国立大学である。学部数は 17 で、自然科学、応用科学、医療健康、建築、社会科学、人文科学、教育、薬学などの課程が設置されている。ペナン島の本キャンパスに加え、ペナン島州本土側の

Nibong Tebal に工学キャンパス、マレー半島東北部のクランタン州に医療キャンパスが存在する。

マレーシア語教育は、本キャンパスにある言語・リテラシー・翻訳学部（School of Languages, Literacies and Translation）で行われている。この学部の主な機能は、第三言語として諸言語の授業を提供すること、学部・大学院課程、そして翻訳、編集、通訳の実務教育である。選択科目として提供されている外国語は、アラビア語、北京語（中国語普通話）、日本語、ドイツ語、韓国語、フランス語、スペイン語、タミル語、タイ語の全 9 言語である。その他、必修科目として英語とマレー語、副専門科目として中国語、日本語、アラビア語が提供されている。

マレーシア理科大学におけるマレー語の教育プログラムは図 2 のような段階に分かれて、構成されている。このプログラムは留学生（学部、大学院、交換留学生）、そしてマレーシア駐在の人を対象としている。学生の所属・専門は理科系、文科系、教育、建築と様々である。受講生の国籍は、中東、中国、日本が主である。マレー語プログラムの教師は全部で 6 人いる。CEFR の適用はない。以下で、図 2 の各段階を詳しく見ていく。

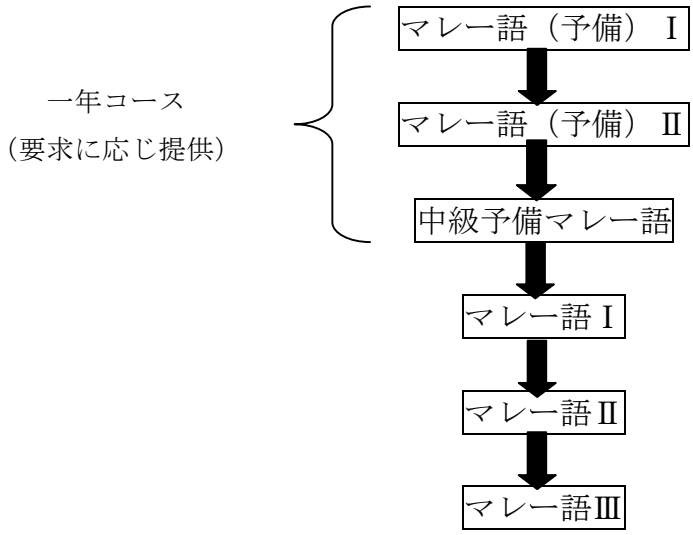

図 2　マレーシア理科大学におけるマレー語プログラム

①LKM100　マレー語 I

インドネシアの留学生を除くすべての留学生が対象であり、必修科目である。卒業の条件となっている。レベルは初級で、語彙は 500 くらい(名詞、動詞、形容詞、機能語)が想定されている。毎学期開講される。受講学生数は一学期の平均で 200 人ほどだという。2013 年秋学期は、本キャンパスで 190 人、全キャンパスで 215 人がこの授業に登録していた。クラス数は 14～16 と多い。授業時間数は、週に 4 時間、一学期全体では 56 時間である。テキストは独自の教材を作成して、使っている（図 3）。

図 3　マレーシア理科大学「LKM100　マレー語 I」の教科書

②LKM200　マレー語 II、LKM300　マレー語 III

この授業もマレー語 I と同様、インドネシアの留学生を除くすべての留学生を対象とする。文化系の学生に対しては、必修科目となっている。レベルは中級である。学生数は 2013 年の第 2 学期でマレー語 II が 25 人、マレー語 III が 36 人だった。

マレーシア理科大学では、表 1 に示した 12 段階の尺度で成績評価を行っており、マレー語プログラムもこれに従っている。

表 1　マレーシア理科大学における成績評価尺度

成績	GPA 計算のためのポイント	合否
A	4.00	合格
B+	3.33	
A–	3.67	
B	3.00	
B–	2.67	
C+	2.33	
C	2.00	
C–	1.67	
D+	1.33	
D	1.00	不合格
D–	0.67	
F	0.00	

学生がどのレベルの科目を受講するかの決定は、初級から始まる場合と初級以上から始まる場合とで異なる。まず初級から始まる場合、プレースメントテストはない。一方、初級以上から始まる場合は成績証明書と面接が必要となる。成績証明書に関しては、例えば、マレー語圏である南タイからの留学生は成績証明書を提出する。しかし、そこから実際のレベルを予測することは難しい。また、他の国内大学の成績証明書とシラバスが提出される場合には、実際のレベルを推測することより容易であるものの、他大学のシラバスの詳細を収集し、情報を蓄積する必要があるという。面接は口頭面接でレベルを判定する。

次に CEFR に関してであるが、CEFR という名前を出したところ、聞いたことがないという返答が返ってきた。そこでこちらでその内容を説明したところ、ヨーロッパの言語でそのようなことをやっているのを聞いたことがある、ということだった。「マレー語にもそのようなシステムが必要か？」という質問に対しては、必要ではあるが、大学ごとにそれぞれ独自のシステムや方針があり、国内大学間で一致することは難しいだろうという回答だった。

2.2　マラヤ大学（Universiti Malaya）

マラヤ大学はクアラルンプールに位置し（図 1 の②）、1962 年に設立され、マレーシア初の大学である。17 の学部があり、科学、医学、経済・行政学、工学、法学、言語・言語学、人文科学、教育などの課程が提供されている。

マラヤ大学では、マレー語教育は生涯教育センター（Centre for Continuing Education）で

行われる。このセンターは 1998 年に設立され、トレーニング及び教育プログラムとして様々な分野の短期コースを提供している。対象は主に留学生、行政職員、起業家、トレーナー、プロのコンサルタントなどである。Executive Diploma、Certificate Course、Certified Business & Executive Coach、企業研修、英語コース、Hospitality Course の全部で 6 つの課程がある。

マラヤ大学におけるマレー語の教育プログラムはモジュール I からモジュール IV までの 4 段階に分かれて、構成されている。これは大使、公務員、マレーシア駐在の人、留学生を対象としている。学生の国籍は中東、東アジア、東南アジアで、留学生の人数は 50～60 人ほどである。受講生の所属、専門は様々な分野にわたっている。教師は全部で 3 人いる。クラス数は 15～20 で、週に 4 時間行われる。学期に換算すると 56 時間で、毎学期開講される。CEFR の適用はない。

授業内容は、数字、文法（時間マーカー、前置詞など）、簡単な文を読んで意味を理解し、内容理解問題に答えること、短い文章を書くことに集中する。各レベルの概要は以下の通りである。

①モジュール I
時間数：110 時間（週 5 回）
レベル：初級（文の構造が中心）
位置付け：留学生の必修科目

②モジュール II
時間数：110 時間（週 5 回）
レベル：初級（文法が中心）

③モジュール III
時間数：100 時間（週 5 回）
レベル：中級（文法と文化体験）。モジュール III 合格は、高校卒業資格である SPM（Sijil Pelajaran Malaysia）に相当する

④モジュール IV
時間数：100 時間（週 5 回）
レベル：上級（一対一で行う）

マラヤ大学では、表 2 に示した 11 段階で尺度で成績評価を行っており、マレー語プログラムもこれに従っている。

表 2　マラヤ大学における成績評価尺度

成績	GPA 計算のためのポイント	素点
A	4.00	80–100
A–	3.70	75–79
B+	3.30	70–74
B	3.00	65–69
B–	2.70	60–64
C+	2.30	55–59
C	2.00	50–54
C–	1.70	45–49
D	1.30	40–44
D	1.00	35–39
F	0.00	00–34

学生がどのレベルの科目を受講するかの決定については不明である。一方、CEFR に関しては、聞いたことがあるようだが、適用されてはおらず、「ポイント制度」（恐らく、GPA のポイントのことだろう）を適用しているという回答が帰ってきた。CEFR のような達成度に基づく評価基準と個々の科目の成績の区別があまり付いていないのかもしれない。

2.3　マレーシア国民大学（**U**niversiti **K**ebangsaan **M**alaysia）

マレーシア国民大学は本学の協定校である。スランゴール州バンギ（図 1 の③）に位置する。1970 年にマレー語での高等教育を実践するための大学として設立された国立大学である。学部は 13 あり、情報科学、工学、経済学、医学、法学、建築、イスラーム研究、人文社会科学、教育などの学部がある。スランゴール州バンギの本キャンパスのほかに、Jalan Raja Muda Abdul Aziz キャンパスと Cheras キャンパスを有する。

マレーシア国民大学にはマレー語教育を行っている部局が 2 つ存在する。マレー世界・文明研究所（Institut Alam dan Tamadun Melayu、以下 ATMA）、そして一般教育センター（Pusat Pengajian Umum）である。

まずは ATMA でのマレー語教育について述べる。ATMA はマレー文化と文明を世界に紹介することを目的としている。コースとしては修士課程と博士課程の大学院のみで、主に以下の 4 分野を専門とする。

- 考古学、文化とビジュアルアーツ
- マレー文学、言語学
- 理論の構築とマレー認識論

- マレー世界の科学技術

ATMAにおけるマレー語の教育プログラムはレベル1からレベル8の8段階に分かれて、構成されている。レベル6〜8は、常時開講されているのではなく、要望に応じて開講される。1つのレベルは、60時間の授業と40時間の課外活動の合計100時間で構成される。ATMAの授業は大学の正規の科目ではなく、ATMAが主催する独立の語学講座である。したがって、大学の単位にはならない。学生の国籍は中国、日本、欧米、中東などで、教師の人数は4人いる。教科書は、独自の教材を作成して用いている。CEFRの適用はない。

学生がどのレベルの科目を受講するかの決定については、特に決まった方法は無さそうであるという印象を受けた。レベル分けは、多くの場合、学生の自己申告で決まるという。また、読解能力の検査（文章を読んでどのぐらい理解できるのか）を実施する場合もあるという。CEFRに関してだが、まずCEFRという名前については、初めて聞いたとのことであった。「CEFRのようなシステムは必要か？」という質問については、「あったらよい」という回答だった。

次に、一般教育センターにおけるマレー語教育について紹介する。一般教育センターはマレー語と英語の話す・書く両方の効果的なコミュニケーションができる人間を育成することを目的としている。コースとしては、英語コミュニケーション、マレー語、そしてイスラームとアジアの文明などがある。一般教育センターのマレー語プログラムにはレベル1とレベル2の2つのレベルがある。学部･大学院を対象とした部局である。1992年以降、一般教育センターの開講するマレー語の科目が、大学院の留学生の必修科目になっている。理工系分野を専門とする中東、東南アジアからの学生が履修者の大半を占める。CEFRの適用はない。

学生がどのレベルの科目を受講するかの決定については不明である。CEFRに関しての質問に対しては、CEFRという言葉を聞いたことがない、という回答だった。

3. まとめと考察

3.1 まとめ

現地調査の結果、マレーシアの大学における外国語としてのマレー語教育は各大学で行われていることがわかった。そのマレー語教育は、主に中東や東南アジアからの留学生に対する初級レベルの必修科目として行われているのが中心であった。中級、上級レベルは、現地と密に関わろうとする東アジアや欧米からの留学生に対し、必要に応じて提供されている。使われている教材や教育法は未整備と言える。

聞き取り調査を行ったマレー語教育担当者全員（USM 1、UM 1、UKM 3）がCEFRという名前を聞いて、聞いたことがないという反応だった。まず、マレーシアにはCEFRに代わる明確な到達度評価基準は存在しない。しかしながら、それにより問題も生じていない。CEFRのようなシステムが必要かと聞けば、「必要だろう」という答えが返ってきたが、そ

れほど切迫感はなかった。

3.2　考察

マレー語教育における教材、教育方法確立の必要性は決して低くはない。外国語としてのマレー語教育は、個々の大学で独立して行われており、大学間の連携はない。しかし中東や東南アジアからの留学生が多数存在し、初級レベルでの需要は存在するので、大学間の連携により、教材や教育法を確立することには意味があるだろう。CEFR のようなシステムは、その過程で必要に応じて導入されることになるのかもしれない。

外国語としてのマレー語教育を受ける必要性が出てくるのは学生だけではない。それは外国人労働者である。マレーシアには 158 万人（総人口の約 5%）の合法外国人労働者がいる（2012 年）。彼らの出身国は主にインドネシア、ネパール、ミャンマー、バングラデシュである。現在、マレーシア政府は彼らに対し、基本的マレー語能力の習得を義務付けていない。政府や企業が一定レベルのマレー語能力を雇用の条件とすれば、初級レベルの学習者は飛躍的に増え、到達度を客観的に示す指標も必要になるだろう。